

16 世紀後半の時事報告における 関係詞の分布について

—— パンフレットとピラに関する文体論的考察¹ ——

森 澤 万 里 子*

1. 導入

15 世紀にマインツで発明され、殊に 16 世紀に入ってから西欧社会にコミュニケーション形態の変容をもたらした活版印刷が、ドイツ文章語の成立過程にも影響を及ぼしたことはしばしば指摘されることがからであるが、その詳細についてはいまだなお解明の余地が残されている。例えば、諸方言の統一化傾向と平行して一印刷都市内で言語的均一化が進行した経緯、さらに言うならば、活版印刷が都市言語に影響を及ぼした可能性を探ることもさらなる調査が必要な課題の一つに数えられよう。このような観点のもとで、拙論「16 世紀ニュルンベルクの印刷事情」(2008)²では、16 世紀のドイツにおいて主要な印刷都市の一つであったニュルンベルク³を例にとり、上述の課題に取り組む端緒を探っ

* 福岡大学文学部教授

¹ 本稿は、平成 20 年度より科学研究費補助金の支給を受けて進めている研究（基盤研究（C）、研究代表者：森澤万里子、課題名：メディアと都市言語 —16 世紀ニュルンベルクのパンフレット・ピラに関する文体研究、課題番号：20520401、平成 22 年度まで継続予定）の成果の一部をまとめたものである。

² 森澤万里子：16 世紀ニュルンベルクの印刷事情 —都市言語とメディアの関係を探る予備的研究— 『ドイツ文学』第 136 号，2008，85-99 頁。

³ ドイツ語史における印刷都市ニュルンベルクの重要性については例えば次の箇所を参照：

た。その際、資料として光をあてたのが、活版印刷という新メディアの特質を最も生かす可能性を持っていたパンフレットとビラ、中でも16世紀後半に出版された政治・社会情勢等を伝える時事報告⁴であり、この内容を備えたパンフレット一点に関する予備調査の結果をふまえて、例えばこの資料における関係詞の分布を調査することも上述の問題に迫る手がかりとなりうる点を指摘した。⁵

Peter von Polenz: Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. 1. Bd. 2. Aufl. Berlin / New York (de Gruyter) 2000, S. 162.

⁴ 「時事報告」は Neuigkeitsbericht の訳語である。原語それ自体は、16世紀の印刷業者レーオンハルト・ホイスラーに注目したベッツェルが、その著書において政治・社会情勢、天の異常現象 (Himmelserscheinung) 等を伝えるパンフレット及びビラの総称として用いたものである (Vgl. Irmgard Bezzel: Leonhard Heußler (1548-1597). Ein vielseitiger Nürnberger Drucker und geschickter Verbreiter von Neuigkeitsberichten. Wiesbaden (Harrassowitz) 1999, besonders S. 57-61).

時事報告は新聞の先駆けと言われるものであるが、両者の相違は、概して言えば定期刊行物であるか否かという点にある (Vgl. Peter von Polenz: Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. 2. Bd. Berlin / New York (de Gruyter) 1994, S. 16). ちなみに、ドイツ語で書かれた初期の新聞としては、1609年にシュトラースブルクで刊行された „Relation“ や、同年ヴォルフエンビュッテルで発行された „Aviso“ が挙げられる。これらのテキストにおける統語現象については、その分析結果の一部が例えば次の論文でまとめられている: Ulrike Demske-Neumann: Charakteristische Strukturen von Satzgefügen in den Zeitungen des 17. Jahrhunderts. In: Neuere Forschungen zur historischen Syntax des Deutschen. Referate der Internationalen Fachkonferenz Eichstätt 1989. Hrsg. von Anne Betten. Tübingen (Niemeyer) 1990, S. 239-252. ただし、初期の新聞に比して、その前身である時事報告に関しては、研究が大きく進んでいるとは言い難いように思われる (森澤 (2008), 96頁参照).

ここで、時事報告との関連において印刷都市ニュルンベルクに着目する意義について言しておく、それは経済力を生かして、帝国都市の中でも特別な地位を保っていたこの都市が、アウクスブルク、ヴェネツィア等と並び、時事情報を交換する中心地の一つとなっていたことにある (Vgl. Karl Schottenloher: Flugblatt und Zeitung. Ein Wegweiser durch das gedruckte Tagesschrifttum. 1. Bd. Berlin (Schmidt) 1922: Nachdruck. Neu herausgegeben, eingeleitet und ergänzt von Johannes Binkowski. München (Klinkhardt & Biermann) 1985, S. 155).

⁵ 森澤 (2008), 95-96頁参照。指摘の概要は次の通り: 16世紀後半にニュルンベルクで出版されたパンフレット一点 (本文13頁) に関する予備調査では、そこに現れる主要な関係詞 *der*, *welcher*, *so* — *der* 及び *welcher* については斜格も調査対象となっている。現代語では通常用いられない関係詞 *so* の用例については本稿2章を参照 — の分布が、同時代に作成された官庁や市民のテキストに見られるそれとは異なっていた。具体的には、

そこで本稿では、資料となるパンフレットの点数を増やし、ピラも調査対象に含めることにより、16 世紀後半の時事報告に見られる関係詞の分布をより詳細に分析することとしたい。その際、比較の対象とするのが、同じ時期に作成された官庁のテキスト及び市民の私的テキストにおける関係詞の分布である。分布を調査するのは、現代語でも定関係代名詞として使用される *der*⁶ 及び *welcher*、そして 16 世紀においてやはり主要な関係詞の一つと見なされる *so* であり、これらは後述するようにそれぞれ異なる文体的特徴を持っていたと考えられている。以下、これら三つの関係詞の分布に関して、16 世紀において威信言語と見なされていた官庁語⁷ 及び市民の言語と時事報告における言語使用の間には相違が見られるのか、また、相違がある場合、その要因は関係詞の文体的特徴を顧慮するならば、どのように説明されうるのかという点を検討していきたい。それにより、16 世紀後半の一印刷都市における言語状況をテキスト種と文体手段の関係をふまえて概観することが本稿の目的である。この課題に取り組むため、まずは 16 世紀のテキストにおける関係詞の分布及び関係詞が帯びている文体的特徴について先行研究が指摘した点の確認から始めることとする。

2. 先行研究による指摘の概要

現代ドイツ語では、上述の通り *der* 及び *welcher* が定関係代名詞として用

時事報告では *der* よりも *so* と *welcher* の、殊に後者の出現率ははるかに高いのであるが、例えばダルによって、ゲーテやシラーが *welcher* を頻繁に用いていること、また、19 世紀にはこの関係詞の出現率が *der* のそれを大きく上回ることが指摘されている (Vgl. Ingerid Dal: *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. 3. Aufl. Tübingen (Niemeyer) 1966, S. 203) ことから、*welcher* を中心に他の時事報告における関係詞の分布を調査することにも十分意義があるように思われる。

⁶ 本稿では斜格も顧慮されているが、煩雑さを避けるため、男性・主格の語形で全体を代表させることとする。*welcher* についても同様である。

⁷ Vgl. Dirk Josten: *Sprachvorbild und Sprachnorm im Urteil des 16. und 17. Jahrhunderts. Sprachlandschaftliche Prioritäten, Sprachautoritäten, sprachimmanente Argumentation*. Bern / Frankfurt a. M. (Lang) 1976, S. 144.

いられるが、一般に見られるのは *der* である。 *welcher* が現れるのは特に音的な面で問題がある場合で、⁸ 例えば (1) では *welche* の使用により *die* の重複が回避されている。

- (1) In dieser Welt sind die vermeintlichen Spitzen der Gesellschaft ebenso kaputt wie **die, welche die** Autorin mit dem Begriff »graumäusig« kennzeichnet. (Nürnberger Nachrichten, 20.03.2006)⁹

16 世紀において、これらと並んで関係詞として用いられる *so* の用例を次に挙げておく。

- (2) [...] dem Herrn Bragadino / **so** dißmals deren orten Kriegsobrister gewest / [...] (パンフレット, Nr. 4, Aiij¹⁰)

恐らく、現代語と異なり三つの関係詞が競合する点、そして文章語が展開する 16 世紀に関して、関係文という複雑な構文の形成手段の一つを考察することに大きな意義が認められる¹⁰ ことから、この世紀における *der*, *so*, *welcher* の分布については既に先行研究においてその分析が進められている。例えば Schieb (1978)¹¹, Baldauf (1982)¹², Brooks (2006)¹³ によるものであるが、

⁸ Vgl. Duden. Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. Hrsg. von der Dudenredaktion. Bearbeitet von Peter Eisenberg u. a. 6. Aufl. Mannheim u. a. 1998, S. 346. また、*welcher* は高尚な文体手段であるとも言われる (Vgl. Polenz (1994), S. 277).

⁹ この用例はマンハイムのドイツ語研究所がインターネット上で公開している言語資料検索プログラム COSMAS II (C2API-Version 3.8.0.8) により見出だされたものである (検索日: 2009 年 6 月 13 日)。

¹⁰ Vgl. Kunibert Baldauf: Die Relativsatzeinleitung in der Luthersprache. In: Sprachwissenschaft. Hrsg. von Rudolf Schützeichel. 7. Bd. Heidelberg (Winter) 1982, S. 448-480, hier S. 449.

¹¹ Gabriele Schieb: Relative Attributsätze. In: Zur Literatursprache im Zeitalter der frühbürgerlichen Revolution. Untersuchungen zu ihrer Verwendung in der Agitationsliteratur. Autorenkollektiv unter der Leitung von Gerhard Kettmann und Joachim Schildt. Berlin (Akademie-Verlag) 1978, S. 441-526.

¹² Siehe Anm. 10.

¹³ Thomas Brooks: Untersuchungen zur Syntax in oberdeutschen Drucken des 16.-18.

これらのうち本稿と最も関連が深いのが、出版物に見られる統語現象の変化を扱った Brooks (2006) である。Brooks (2006) は、標準ドイツ語の成立過程を探る従来研究ではルタードイツ語 (Lutherdeutsch) を生み出した東中部ドイツ語に重点が置かれることの多かった点を指摘した上で、東上部ドイツ語、即ちバイエルン・オーストリア方言に主眼をおき、この方言がドイツ語史において果たした役割を検討している。資料とされた印刷物は、説教集や祈祷書等の宗教的テキストと、公文書の他、年代記や式典記録等も含む世俗的テキストの二種である。関係詞はこの著書が考察の対象とした統語現象の一つであり、顧慮された期間も 16 世紀から 18 世紀と幅広いが、¹⁴ 以下、Brooks (2006) の調査結果のうち、本稿の内容と大きく関連する部分の概要を記しておくこととする。なお、Brooks (2006)、そしてこの書もその内容をふまえた Schieb (1978) や Baldauf (1982) においても、関係詞の分布を分析するには競合関係を顧慮して次のようなグループ分けがされている。¹⁵

- a) 純粹格 (主格, 属格, 与格, 対格) もしくはそれに相当する関係詞¹⁶ :
- (3) Die Fürstlich Durchleuchtigkeit aber / **welche** bey eroberung

Jahrhunderts. Frankfurt a. M. u. a. 2006.

¹⁴ Brooks (2006) は、16 世紀前半の関係詞の分布については集中的に研究が行なわれているものの、16 世紀後半以降に関しては、データに基づく (empirisch) 研究が殆ど見られない点を指摘している (Vgl. S. 121).

¹⁵ Schieb (1978) を始めとする先行研究及び本稿が目した関係文は、グループ a [及び b] の用例からも看取されるように、付加語的機能を持つもの、即ち、上位文に先行詞として名詞句が現れるタイプのものである。従って、(I) のように先行詞が現れない関係文や、(II) のように関係詞 —ここでは welches— が先行する文の内容を受けるタイプのもものは調査の対象外となっている。

(I) [...] Nach disem habē die Moscowitter / was noch bey leben / hinder sie auff ire Pferd gesetzt / vnd dauon gefürt. (パンフレット, Nr. 1, B')

(II) Anfenklich ist der Himel gar hell gewesen / nachmals blut rot worden / welches nicht lang gewehret / [...] (ピラ, Nr. 31)

¹⁶ このグループに属しうる関係詞の詳細とその用例については次の箇所を参照: Mariko Morisawa: Notizen zur Erforschung der Relativsatzeinleitungen im 16. Jahrhundert. In: The Bulletin of Central Research Institute Fukuoka University. Vol. 1 / No. 8. Fukuoka 2002, pp. 1-29, here p. 7.

vnd einnam diser Vestung selber gewest / [...] (パンフレット, Nr. 11, Aiij[†])

b) 前置詞句もしくはそれに相当する関係詞¹⁷ :

(4) [...] ein elends Häußlein [...] / **in welchem** er sich vor dem greulichen vnd schröcklichem / jimmerwerendem vnge-stümmen wetter / [...] endlich möchte auffhalten / [...] (パンフレット, Nr. 6, [Aiiiij][†])

(5) [...] an das ort [...] / **da** dann die Thonaw in das schwartz Meer felt / [...] (パンフレット, Nr. 11, [Aiiiij][†])

本稿ではさしあたりグループ a に的を絞って調査を行なうため、Brooks (2006) のグループ b に関する記述は割愛することとする。

16 世紀後半に関しては、まず 1560 年頃のテキストにおける調査結果が挙げられているが、それによると der の出現率は 62.3%, so は 23.1%, welcher は 14.7% である。¹⁸ 即ち、der が最も優先して用いられる関係詞であり、それに so, そして welcher が続く。¹⁹ しかし、16 世紀末になると、これらの関係詞

¹⁷ グループ b に属しうる関係詞の詳細とその用例は次の箇所を参照：Morisawa (2002), p. 18.

¹⁸ Vgl. Brooks (2006), S. 124, Tabelle 5a, S. 128, Tabelle 5b, S. 132, Tabelle 5e; auch S. 135, Graphik 5a.

¹⁹ ちなみに、Brooks (2006) は、1560 年頃のデータと並べて 1530 年頃のものも掲げているが、それによると、der の出現率は 60.4%, so は 30.0%, welcher は 9.7% である。この結果は、der が最頻出の関係詞であるという点で、16 世紀前半に成立したテキストを資料として調査を行なった Schieb (1978) 及び Baldauf (1982) が示したそれと一致している。他の二点と異なる Schieb (1978) の特徴は、資料としたテキストの著者がさまざまな地域の出身である、即ち、複数の異なる地域に関するデータが挙がっている点にあるが、いずれの地域においてもやはり der が最も多用される関係詞となっている (Vgl. S. 503)。また、ルターの聖書訳、著作、書簡について調査した Baldauf (1982) も、全てのテキストグループにおいて der の出現率が最も高いとの結果を出している (Vgl. S. 478f.)。

Brooks (2006) が掲げた 1530 年頃の、そして何よりも 1560 年頃のデータでは、関係詞の出現率の順位という点で、註 5 でふれた森澤 (2008) の予備調査とは異なる結果が示されていることになるが、この点に関しては 3 章で改めて検討することとする。

が示す比率に大きな変化が生じる。der の出現率は 34.0% と後退するが、これに対し so は 30.4%, welcher は 35.7% の割合で現れるようになる。わずかな差ではあるが, welcher が so のみならず der にも増して多く例証される点は注目に値することがらであろう。ちなみに, これ以降 18 世紀にわたり, welcher が概ね最も多用される関係詞の地位を保つことになる。²⁰ so については, これが最頻出の関係詞となることはなかったと Brooks (2006) は述べているが, その出現率も概して言えば 17 世紀末にかけて伸びていく。²¹

以上が, Brooks (2006) による指摘の主要点であるが, そこで述べられた 16 世紀後半に見られる三つの関係詞の出現率の推移は, これらの成立順とも関連すると考えられる。

三つの関係詞の中で最も古くから用いられるのは der であり, 既に古高ドイツ語時代のテキストにおいて例証される。²² so 及び welcher が関係詞として使用されるようになるのはかなり時代が下ってからのものであり, 前者の用例は 14 世紀のテキストに見出すことができる。²³ 関係詞としての welcher の初出は 13 世紀末の中世オランダ語とされている。²⁴ 14 世紀には既にケルンの官庁がこの関係詞を少なからず用いており,²⁵ 他の高地ドイツ語圏の地域へは 15 世紀

²⁰ 後述するように, welcher は低地ドイツ語から高地ドイツ語へ伝播したと言われるが, Brooks (2006) によると, その受用については上部ドイツ語が東中部ドイツ語より進歩的 (progressiv) であった (Vgl. S. 129, 135)。また, テキスト種に関して言えば, welcher は宗教的テキストよりも世俗的テキストで多用されるようになる (Vgl. S. 130)。

²¹ Vgl. Brooks (2006), S. 131f.

²² Vgl. Dal (1966), S. 199.

²³ Vgl. Robert Peter Ebert: Historische Syntax des Deutschen II: 1300-1750. 2. Aufl. Berlin (Weidler) 1999, S. 164. この箇所では挙げられている最も古い so の用例は 1371 年のものである。中高ドイツ語では関係詞としての so の使用はごく稀にしか見られない (Vgl. Hermann Paul: Mittelhochdeutsche Grammatik. Bearbeitet von Thomas Klein u. a. 25. Aufl. Tübingen (Niemeyer) 2007, S. 405)。

²⁴ Vgl. Siegfried Beyschlag: Zur Entstehung des bestimmten Relativpronomens *welcher*. In: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur. Hrsg. von Edward Schröder. 75. Bd. Berlin (Weidmannsche Verlagsbuchhandlung) 1938, S. 173-187, hier S. 173f.

²⁵ Vgl. Beyschlag (1938), S. 174.

に、殊にハンザ同盟都市の官房経由でもたらされた。²⁶

以上を顧慮すれば、1560年頃までは、古くから関係詞として用いられた *der* の出現率が最も高く、その後、新たに成立した二つの関係詞が出現率を増すことにも納得がいく。また、競合関係が生じるまでは *der* のみが主要な関係詞だったと言えるならば、この関係詞はそれまで文体上無標だった²⁷ と見なすこともできよう。逆に *so* や *welcher* については、これらの伝播の経緯、特にこれらが用いられ始めた、もしくは多用されるようになったテキスト種との関連で、その文体的特徴を検討する必要性が生じてくる。*so* は主として官庁のテキストで用いられるようになったと言われる²⁸ が、Brooks (2006) もテキスト種を顧慮した独自の調査結果をふまえて、この関係詞が官庁語に特徴的なものであることを示唆している²⁹。*welcher* もその伝播の過程からして当初は官庁語的な色彩を強く帯びていたと想像されるが、Ebert (1999) によると、16世紀において *welcher* は教養語、そしてまた商用語としての性格を持つようになる。³⁰ Brooks (2006) にはこの関係詞を商用語とする記述は見られないが、教養語的な性質を持つと結論づけている³¹ 点では Ebert (1999) と見解を一つにしていると言ってよからう。

²⁶ Vgl. Beyschlag (1938), S. 175; Ebert (1999), S. 162. ただし、注意が必要なのは、中世オランダ語の *welcher* は主として関係形容詞として使用されており、高地ドイツ語圏でも当初はこの用法で用いられた点である。

(III) [...] die zu Novigrad / **welche** grosse Vestung vngefährlich anderthalb vngerische meyl von Vacia oder Wotzen drey meyl von Ofen / vnd bey sibem meylen von Stulweissenburg gelegen / [...] (パンフレット, Nr. 11, [A])
本稿では、このような関係形容詞に関するデータは顧慮されていない。

²⁷ Baldauf (1982) は *der* を「大衆的 (volkstümlich)」な関係詞と見なしており (Vgl. S. 479), Brooks (2006) もこの見解を引き継いでいる (Vgl. S. 135) が、別の箇所ではこの関係詞を「中立的 (neutral)」とも形容している (Vgl. S. 129).

²⁸ Vgl. Ebert (1999), S. 164.

²⁹ Vgl. Brooks (2006), S. 132f.

³⁰ Vgl. Ebert (1999), S. 162. この箇所では *welcher* は „gelehrten- und geschäftssprachliche Variante“ と表現されている。

³¹ Vgl. Brooks (2006), S. 135. この箇所では *welcher* は „eine eher bildungssprachliche

それでは、以上の先行研究における記述をふまえ、異なる文体的特色を帯びるとされる三つの関係詞が、16 世紀後半にニュルンベルクで印刷された時事報告においてどのような分布を見せるのかという点を検討することとする。

3. 16 世紀後半の時事報告における関係詞の分布

関係詞の分布に関する調査結果は、時事報告の出版形態を顧慮し、「パンフレット」と「ビラ」に分けて確認する。ここで付言するならば、出版形態を顧慮して両者の定義を行なう際、元来一枚刷りのものしか指さない「ビラ」³²については大きな問題はないが、「パンフレット」を分量的に限定するのは実のところ容易ではない。例えば、パンフレットが大量に世に出回った宗教改革期に関して言えば、その半数以上が 8 枚、即ち 16 頁以下の分量であるが、有名なグスタフ・フライタークのパンフレット・コレクションにおいては、17 世紀に出版されたものの中に 158 枚に及ぶパンフレットを見出すこともできる。³³ただし、パンフレットは枚数が増えれば書籍に、その逆であればビラに近くなると言われる³⁴ことから、本稿では、民衆にとって書籍よりも身近な存在であった出版物を対象とするという意味合いで、さしあたり 3 枚以上 10 枚以下のものに限定して資料としている。³⁵調査を行なったパンフレットは 11 点で、いずれもニュルンベルクの業者レーオンハルト・ホイスラー³⁶が印刷したものである。時事報告の具体的内容は、当時キリスト教徒の宿敵とされていた

[Variante]“と評されている。so 及び welcher の文体的特徴に関する Brooks (2006) の調査結果は、Schieb (1978) 及び Baldauf (1982) が示した見解を概ね裏付けるものとなっている点もここで付言しておく。

³² 「ビラ」に相当するドイツ語は Einblattdruck もしくは Einblatt である。Flugblatt と呼ばれることもある。

³³ Vgl. Johannes Schwitalla: Flugschrift. Tübingen (Niemeyer) 1999, S. 8.

³⁴ Vgl. Schottenloher (1985), S. 17.

³⁵ 短いテキストのものほど廉価であることから、書籍を買うことのできない家庭にも販路を切り開くことが容易であった (Vgl. Schwitalla (1999), S. 8).

³⁶ ホイスラーは 16 世紀における最も重要な時事報告の印刷業者の一人であり、ドイツで彼に比肩しうるのはケルンのニコラウス・シュライバーのみと言われている (Vgl. Bezzel (1999), S. 57).

トルコ軍の戦況や他国の政治，社会状況等である。ビラは43点を資料としており，いずれもニュルンベルクで出版されているが，その印刷はホイスラーに限らず，さまざまな業者が手がけている。内容はトルコ軍に関するものに加え，天の異常現象 — 三つの虹の出現 — や幻影，珍奇な生物 — 首にひだ襟のように見える羽を蓄えた鳥 —，犯罪など，パンフレットに比べると多岐にわたっている。

それではまず，パンフレットにおける関係詞の出現率を挙げておくこととする。括弧内の数字は実数である。

表1：パンフレットにおける関係詞の出現率

der	so	welcher	その他	計
22.71%	37.12%	35.81%	4.37%	100%
(52)	(85)	(82)	(10)	(229)

表1から見て取れるように，ニュルンベルクで出版されたパンフレットでは，soの出現率が最も高く(37.12%)，次いでwelcherが多用されており(35.81%)，いずれもderに10%以上の差をつけている。2章でふれたように，Brooks (2006)が示した1560年頃のデータではderが最も優先的に用いられる関係詞であり(62.3%)，それにso(23.1%)，welcher(14.7%)が続いていた。殊にderの出現率の順位に関して，ニュルンベルクのパンフレットと上部ドイツの印刷物を比較するならば，両者の間には相違が見られることになる。³⁷

ビラに関するデータは次の通りである。

表2：ビラにおける関係詞の出現率

der	so	welcher	その他	計
25.98%	34.65%	34.65%	4.72%	100%
(66)	(88)	(88)	(12)	(254)

³⁷ soの出現率がwelcherのそれよりも高いという点では，本稿の調査結果は註5で概要を述べた森澤(2008)のそれと異なるが，ただし本稿の表1で掲げたデータを詳細に見ると，二つの関係詞の出現率の差は1.31%にすぎないことが分かる。so及びwelcherの出現率がともにderよりも高いという点では，やはり森澤(2008)と同じ結果が示されていると言えよう。

パンフレットの場合と異なり、so と welcher の出現率は 34.65% と同じであるが、三つの主要な関係詞の中で der の出現率が最も低い (25.98%) 点はパンフレットの場合と共通している。so 及び welcher と der の出現率の差は約 9% である。従って、やはり Brooks (2006) の上部ドイツ語の印刷物に関する調査とは異なる結果が得られたことになる。

それではここで一都市内における言語状況を把握するため、同じ時期にニュルンベルクで作成された官庁のテキスト及び市民の私的テキストに関する調査結果を Morisawa (2004)³⁸ から引用することとしよう。表 3 に「官庁」として掲げたデータは、具体的には官庁が作成した書簡に関するものである。「男性」グループの書き手は、商人や学生であり、調査資料は家族宛の書簡や日記といった私的テキストである。「女性」グループの書き手も商人の妻や学生の姉妹といった一般市民であり、家族宛の書簡を資料としてデータを挙げている。³⁹ いずれも手書きの文書で

表 3：官庁及び市民のテキストにおける関係詞の出現率
(Morisawa (2004), S. 188, Tabelle 3)⁴⁰

	der	so	welcher	その他	計
官庁	36.32% (77)	28.77% (61)	18.40% (39)	16.51% (35)	100% (212)
男性	42.83% (227)	20.57% (109)	28.87% (153)	7.74% (41)	100% (530)
女性	42.06% (45)	10.28% (11)	29.91% (32)	17.76% (19)	100% (107)
計	41.11% (349)	21.32% (181)	26.38% (224)	11.19% (95)	100% (849)

³⁸ Mariko Morisawa: Syntaktische Erscheinungen als Spiegel der Gesellschaft im 16. Jahrhundert. Historisch-soziolinguistische Analyse von Relativsatzeinleitungen in der Nürnberger Stadtsprache. In: Neue Beiträge zur Germanistik. 3. Bd. / Heft 1. Internationale Ausgabe von „Doitsu Bungaku“. Hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. München (iudicium) 2004, S. 183-195.

³⁹ 資料の詳細については次の箇所を参照：Morisawa (2004), S. 194f.

⁴⁰ 本稿で掲げるにあたって、一部手を加えている。

ある点も改めて強調しておく。

表3において当時の威信言語である官庁語と一般市民の私的テキストに共通しているのは、*der* が最も優勢な関係詞となっている点である。ここで *so* と *welcher* の出現率に目を向けるならば、官庁のテキストでは前者が後者よりも多用されており、市民の私的テキストでは男女ともに逆の結果を示している。この表の数値を見る限りでは、*so* を官庁語に特徴的な関係詞とする Brooks (2006) の指摘は妥当なものであるように見受けられる。⁴¹

いずれにせよ、最も出現率の高い関係詞が *der* であるという点においては、Brooks (2006) が 1560 年頃に成立した上部ドイツ語の印刷物に関して述べた結果と同じであると言うことができる。そしてこの結果をさらにニュルンベルクで印刷されたパンフレットとピラにおけるそれと照らし合わせてみるならば、ニュルンベルクという一都市に限定しても、後者が関係詞の分布に関し特異な様相を呈していることが看取されよう。

ここで検証しておかなくてはならないのは、*so* と *welcher* がテキスト種と直接関連づけて考えることのできない機能ゆえに、言うなれば偶発的に調査対象となったパンフレットやピラで多用された可能性である。複数の統語現象を扱った Brooks (2006) には関係詞の機能に関する詳細な分析は見られないが、ルターテキストを綿密に調査した Baldauf (1982) では、例えば次の二点が指摘されている。即

⁴¹ 参考までに、16 世紀後半のニュルンベルクで出版された宗教的テキストに関するデータも掲げておく。資料は次の通り：Veit Dietrich: Summaria Vber die ganze Bibel [...] Nürnberg 1578, Neues Testament, XVIII^r, 20-XXX^r, 41 (Das Bonner Frühneuhochdeutsch-Korpus Korpora.org (<http://www.korpora.org/fnhd/>), Text 135). ニュルンベルク出身のディートリヒによるこの書は、当時聖書と並んで一般市民にも比較的良好に読まれた精神修養書の一つで、1545 年に初版が上梓されてから、16 世紀のうちに新たな版を少なくとも 10 回重ねている (Vgl. Bernhard Klaus: Veit Dietrich. Leben und Werk. Nürnberg (Selbstverlag des Vereins für bayerische Kirchengeschichte) 1958, S. 6). 資料とした 1578 年版では、*der* の出現率が 50.48% (53 例)、*so* が 27.62% (29 例)、*welcher* が 16.19% (17 例)、その他が 5.71% (6 例) となっている。やはり *der* を最頻出の関係詞と呼ぶことができるが、*so* と *welcher* の出現率は表3で見た官庁の場合と大きく変わらない点に注意が惹かれる。

ち、同語反復回避のために *welcher* 及び *so* が用いられる点、⁴² そして、同一の先行詞に複数の関係文が接続するとき、それらが同一の関係詞によって導入されることを避けるため、関係文の一つで *welcher* が使用される点である⁴³。第一の指摘に副う用例はニュルンベルクで印刷されたパンフレットやビラにおいても見出だされる。

(6) [...] das er **die so** an sein wort glauben / soll aufferwecken zum ewigen leben [...] (ビラ, Nr. 7)

(7) [...] beyde örter [...] / **welche die** Christenheit ohne widerstandt einbekommen / [...] (パンフレット, Nr. 9, Aiij)

(6) では指示代名詞 *die* に関係詞 *so* が後続し、(7) では定冠詞 *die* に関係詞 *welche* が先行しているが、いずれにおいても *so* もしくは *welche* を使用しなければ、*die* が重複して現れるところである。

ただし、*so* が同語反復回避のために使用されるのは、パンフレットでは 85 例中 3 例、即ち 3.53% であり、ビラにおいても 88 例中 8 例で、9.09% にすぎない。*welcher* についても、パンフレットでは 82 例中 1 例で、その出現率は 1.22%、ビラでは 88 例中 2 例で、2.27% である。従って、時事報告において *so* や *welcher* が多用される主な要因を同語反復回避に求めることには困難があると言ってよからう。

(8) は Baldauf (1982) による第二の指摘に副う用例で、同一の先行詞に接続する二つの関係文のうち、二番目のものが *welcher* によって導入されている。

(8) NEben dem Cometen / **so** den fünfften tag Martij allhie zů Constantinopel gesehen ist worden [...] / **welcher** bey zwölff tagen geschinen / [...] (ビラ, Nr. 7)

ただし、そもそも同一の先行詞に二つの関係文が接続する用例はパンフレットでは

⁴² Vgl. Baldauf (1982), S. 464, 466f. なお、現代語において *welcher* が特にこの機能で用いられる点は、2 章の冒頭で言及した通りである。

⁴³ Vgl. Baldauf (1982), S. 464.

8例しか見出だされず、しかも一方の関係文を *welcher* が導くのもそのうち3例にすぎない。ピラにおいても関係文の一つで *welcher* が用いられるのは9例中4例に留まっていた。⁴⁴ この結果を見る限りでは、時事報告の言語使用はルターのととは異なる傾向を示すと言わざるをえず、たとえ同一の先行詞に複数の関係文が接続する例が時事報告で頻繁に見られたとしても、そこから *welcher* の多用を説明することは難しいだろう。

以上をまとめるならば、パンフレットとピラにおける *so* 及び *welcher* の多用は、これらの関係詞が持つ同語反復回避の機能や、同一の先行詞に接続する関係文が複数あるとき、それらが同一の関係詞によって導入されることを避ける機能にその主たる要因を探ることは妥当ではないということになる。注目すべきは、やはり先行研究によって既に指摘されている両関係詞の文体的特徴であろう。そこで次章においては、官庁体もしくは教養語的と特徴づけられる *so* と *welcher* が時事報告において多用される要因を、このテキストが持つ内容的な特質との関連で探ることを試みたい。

4. テキスト種と文体手段：時事報告の特質

16世紀前半に世に送り出された書籍の大半はラテン語で執筆されたものだったが、点数はさして多くなかったものの、徐々にドイツ語書籍も見られるようになっていた。例えばニュルンベルクでは北方ルネサンスの代表的画家、アルブレヒト・デュラーが著した芸術理論書等が出版されている。しかしながら、専門家を除けば実際にこの種の書物入手した人の数は限られていた。広範な購買層を獲得し、維持し続けることができたのは、第一に聖書や学校の教材として用いられることもあった精神修養書⁴⁵等の宗教的著作であり、⁴⁶そして、パンフレットやピラという形態で

⁴⁴ パンフレットの残る5例では、二つの関係文がそれぞれ *so* と *der* によって（3例）、もしくは同一の関係詞によって（2例）導入されている。ピラでは、*welcher* 以外の異なる関係詞が二つの関係文に現れるのは2例、同一の関係詞が用いられるのは3例である。

⁴⁵ 例えばニュルンベルクの宗教家、ファイト・ディートリヒ（註41参照）の „Summaria

世に出回った時事報告⁴⁷であった。

活版印刷が新メディアとして評価される所以は、情報を広範囲に普及させ、その受容者の反応に応じてさらなる情報を流すことにより、新たなコミュニケーションの形態—新たな発信者と受信者の関係—を生み出したことにある。⁴⁸このような新メディアの特性を最も生かす可能性を持っていたパンフレットやビラにより、殊に宗教改革期には、都市だけでなく、一部の村落にもこの社会的大事件にまつわる新情報が次々ともたらされる。民衆の間でまずビラが出回り始めたときには絵が紙面の大半を占め、それに付されたテキストはごく短いものであった。しかし、絵を介して宗教的、そして政治的な事実にも目を向けるようになった民衆は、さらに詳細な情報を求めるようになり、テキストが中心的役割を果たすパンフレットの需要も増加する。新情報の受容に慣れた民衆は、さらなる新情報も渴望するようになる。その一方で、このような民衆の欲求を満たすことが営利につながることは当時の印刷業者にも十分意識されていた。⁴⁹この点を顧慮するならば、パンフレットとビラの内容が民衆の要望に應えるものとなるよう印刷業者が心を砕いたことも想像に難くなくろう。

殊にビラはテキストの分量が少ないことから、パンフレットよりも字の読めない

Christlicher Lehr für das junge Volk [...]“ (1546) は、学校で教科書として使用された (Vgl. Robert Peter Ebert: Verbstellungswandel bei Jugendlichen, Frauen und Männern im 16. Jahrhundert. Tübingen (Niemeyer) 1998, S. 125).

⁴⁶ 「18世紀に至るまで書籍市場を支配していたのは、精神修養書、説教集、教理問答書、宗教的論争書であり、ルターの聖書訳がこの時代のベストセラーである。当時の殆どの読者に関して言えば、彼等が世俗的な著作物と接触することはごく稀であるか、もしくはあったとしても例外的なことだったと考えてよいだろう」(Brooks (2006), S. 13).

⁴⁷ Vgl. Schottenloher (1985), S. 16. ちなみに、時事報告の中には „Neue Zeitung (新情報)“ という語句をタイトルに含むものが少なからず見られる。例えば本稿で調査資料として掲げたビラ, Nr. 12, 26-29, 36-41, 43 を参照。

⁴⁸ Vgl. Wilhelm Schmidt: Geschichte der deutschen Sprache. Erarbeitet unter der Leitung von Helmut Langner. 6. Aufl. Stuttgart / Leipzig (Hirzel) 1993, S. 103; Hannes Kästner u. a.: Die Textsorten des Frühneuhochdeutschen. In: Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung. 2. Halbbd. Hrsg. von Werner Besch u. a. Berlin / New York (de Gruyter) 1985, S. 1355-1368, hier S. 1362.

⁴⁹ Vgl. Schottenloher (1985), S. 6-9.

民衆⁵⁰ 向きという意味合いが強くなるが、そのような民衆の関心を惹きつけるには絵のインパクト、そして内容のインパクトも必要になる。非日常的なものであればあるほど、また、残酷なものであればあるほど、その内容はビラに適していた。⁵¹ ここで一例として、1558年に成立したと考えられるビラ、„Ware Conterfectung / etlicher ers[c]hrockenlicher vnd zúuor vnerhörter gesicht / [...]“ (Nr. 8)

図： „Ware Conterfectung“
(ビラ, Nr. 8)



を見ておくこととする。

このビラは、絵に描かれたような幻影が天に現れたことをまことしやかに伝えるもので、16世紀にはこの種のものが少なからず印刷された。テキストは、この幻影は神が贖罪を求める日—最後の審判の日のことであろう—がそう遠くないことを示すものだとし、神に救済を求めてたゆまず祈る必要性を説く内容になっている。「幻影」との断り書きはあるものの、右上に描かれたセイレン、左上のドラゴンが天に現れたとするこの記述を16世紀の民衆がどの程度まで真剣

⁵⁰ ちなみに、宗教改革期のニュルンベルクにおける識字率は、都市人口の10%以上と見積もられている (Vgl. Rudolf Endres: Nürnberger Bildungswesen zur Zeit der Reformation. In: Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg. 71. Bd. Nürnberg (Selbstverlag des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg) 1984, S. 109-128, hier S. 127). この数字だけを見るとパンフレットやビラにふれた民衆の数は限られていたように思われるが、当時は識字者が文字を読めない人々の前でテキストを朗読することが日常的に行なわれていた (Vgl. Robert W. Scribner: Flugblatt und Analphabetentum. Wie kam der gemeine Mann zu reformatorischen Ideen? In: Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit. Beiträge zum Tübinger Symposium 1980. Hrsg. von Hans-Joachim Köhler. Stuttgart (Klett-Cotta) 1981, S. 65-76, hier S. 66f.).

⁵¹ Vgl. Schottenloher (1985), S. 161.

に受け取ったかは疑問であるが、この種のピラが作成された意図はむしろ神への帰依を強く促すことにあり、天の幻影の記述は強烈なインパクトで人々の関心を惹きつけ、不安に陥れるための一手段であると考えられるならば、テキストの執筆者が、描写される現象がにわかには信じ難いものであればあるほど、それだけ一層その内容の信憑性を高めるために工夫を凝らしたことは容易に想像されるであろう。テキストの中で 50 名以上の貴族がこの幻影を目撃している点が強調されるのもそのためであると思われる。幻影以外の題材には、ひだ襟のような羽を首にはやした鳥（ピラ, Nr. 22）等、通常見られない特異な形状を備えた動物や植物などもあるが、そのようなピラの内容はやはり珍奇な生物に神の怒りや戒めを読み取り、改心することを強く勧めるものであり、これがピラのテキストの一パターンともなっている。⁵²

天の幻影や珍奇な形状を備えた生物の場合のみならず、当時キリスト教徒の宿敵だったトルコ軍の情勢を伝えるピラやパンフレット⁵³においても、その内容の信憑性は問われるところである。情報網が今日ほど発達していなかったことも影響して、幻影等に比べれば現実味のある内容のものでも、時事報告では、そこで述べられる情報価値の高さを自ら強調しておく必要があったと考えられる。印刷業者は、まずは目のパンフレットやピラをできるだけ多く販売するための工夫をしなければならぬが、それと同時に類似の新情報を入手した場合にそれを多売するための布石も打っておかねばならなかったであろう。特定の題材に関する人々の関心をつなぎとめておくためにも、内容の信憑性の高さは問題になったに違いない。そして、このことこそが、当時の威信言語であった官庁語に増して、時事報告において so

⁵² 日食、月食、彗星等の天の異常現象を扱い、改心や贖罪を求める内容のピラも存在する。今日のように科学的知識が発達していない時代にあっては、日食等も規則なくして起こる不幸の先触れと捉えられ、そのような不幸は改心や贖罪によって回避されうものと考えられていた (Vgl. Schottenloher (1985), S. 182).

⁵³ 中にはトルコ人の残酷さや非道さを描写したものもある (Vgl. Morisawa (2008), S. 92ff.). そのような内容上のインパクトの強さも影響して、トルコに関する題材は当時の人々に人気があり、印刷業者もこの題材を積極的に取り上げた (Vgl. Bezzel (1999), S. 61) のかもしれない。

と *welcher* が *der* よりも多用されたことと関連しているのではないだろうか。即ち、時事報告の信憑性を重みのある文体で強調しようとした結果、官庁語、教養語的な文体手段であった *so* と *welcher* が多用されたと見ることも可能なように思われるのである。

信憑性の強調ということとの関連で注目に値するのが、先に掲げた天の幻影を報じるピラ (Nr. 8) のタイトル „Ware Conterfectung (真の写し絵)“ である。ここでは *war* (現代語では *wahr*) という表現が用いられているが、この他、これと同義語の *wahrhaft* や *wahrhaftig* といった形容詞も 16 世紀後半に印刷された時事報告のタイトル全般で頻繁に見出される。その理由は言うまでもなく、これらの語を使うことによって時事報告 —挿絵も含む— の信憑性を強調するためである。⁵⁴

最後に言及しておきたいのが、17 世紀末から 18 世紀前半のテキストにおける関係詞の分布を取り上げた Semenjuk (1972)⁵⁵ の調査結果である。調査の対象となった地域が主としてライプツィヒを始めとする東ドイツ地域である点に留意する必要があるが、新聞や雑誌 —政治的、学術的、文芸的な内容等を扱ったもの— を資料としていることから、扱う時代を別にすれば本稿の内容と非常に関連が深いと見なすこともできよう。その指摘を概して言うならば、特に文芸的な内容のものとなり、政治的内容のテキストでは *welcher* が最頻出の関係詞であり、1740 年までは *welcher* に次いで *so* が頻繁に現れることもあるということである。⁵⁶ 18 世紀半ばには *so* の後退が顕著になる⁵⁷ が、Brooks (2006) においても 17 世紀末にこの関

⁵⁴ Vgl. Bezzel (1999), S. 62.

⁵⁵ Natalia N. Semenjuk: Zustand und Evolution der grammatischen Normen des Deutschen in der I. Hälfte des 18. Jh. am Sprachstoff der periodischen Schriften. In: Studien zur Geschichte der deutschen Sprache. Berlin (Akademie-Verlag) 1972, S. 79-166.

⁵⁶ Vgl. Semenjuk (1972), S. 131ff. 学術的テキストに関しては、1720 年までは *welcher* が最も支配的な関係詞であることが示唆されている。

⁵⁷ Vgl. Semenjuk (1972), S. 131.

係詞の後退が始まるとの言及があり、その一因はこの時期に官庁語がもはや威信言語として機能しなくなったことにあるとされている⁵⁸。視点を変えるならば、その後退が顕著になる 18 世紀半ばまで、so は官庁体という文体的特質を維持し続けたということにもなる。また、welcher についても、例えば、18 世紀の著名な文法家アーデルングの記述から、この世紀においてもなお、教養語的な文体手段としての機能を保っていたことが見て取れる。⁵⁹ 即ち、18 世紀前半の新聞や雑誌においても、殊に政治的な内容のテキストでは文体に重みづけをする必要があったことから、官庁体の、もしくは教養語的な文体手段である so や welcher がそのような特徴を持たない der よりも多用されたと見ることもできよう。以上述べたようなテキスト種と文体手段の関係が 16 世紀におけるニュルンベルクの時事報告にも当てはまると考えるならば、一確かに so と welcher のうちどちらがより優勢な関係詞かという問題は残るものの— 新聞の先駆けと呼ばれるこのテキスト種に見られる言語使用は、18 世紀前半の政治的内容のテキストにおけるメディア言語と概ね同じ傾向を示していたと言うことも可能なように思われる。

5. 展望

本稿では、16 世紀後半のニュルンベルクにおいてパンフレットやビラという形態で世に送り出された時事報告における関係詞の分布を調査し、その分布は当時の威信言語である官庁語によるテキスト、一般市民の私的テキストの場合とは異なる

⁵⁸ Vgl. Brooks (2006), S. 133f. この他、so の後退の要因として挙げられるのは、統語論上の問題、即ち der や welcher と異なり、屈折によって先行詞との関連を明示できない点である (Vgl. Semenjuk (1972), S. 130).

⁵⁹ アーデルングによると、welcher は改まった語り口に最も適した関係詞であり、打ち解けた口調ではしばしば welcher の代わりに der が用いられる (Vgl. Johann Christoph Adelung: Deutsche Sprachlehre. Berlin (Voß) 1781: Nachdruck. Hildesheim / New York (Olms) 1977, S. 253f.). ちなみに、welcher の後退に関する考察は 2008 年に発表した拙論にまとめてある：森澤万里子：19 世紀における定関係代名詞 welcher の後退 — 文体手段とテキスト種をめぐる考察 — 『言語変化をめぐる独英比較 — 社会言語学的観点から』(平成 18 年度～平成 19 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書, 課題番号：18520340), 2008, 5-32 頁].

傾向を示すことを指摘した。また、その要因をテキスト種と文体手段の関係をふまえて考察することを試み、新聞の先駆けと見なされる時事報告は内容の信憑性が問題となる種類のテキストであることから、ここでは文体に重みを持たせる機能を持つ関係詞が多用された可能性があるとして述べた。

今後さらに分析を行なう必要があるのは、本稿で割愛した「前置詞句もしくはそれに相当する関係詞」 — 2章で挙げた関係詞のグループb — の分布⁶⁰であるが、ニュルンベルクという一都市の言語状況を概観するという面では、時事報告以外の出版物、即ち書籍という形態で世に出回ったテキストも顧慮しなければならないであろう。例えば銃砲に関する専門書⁶¹等の世俗的テキストを資料に加えることも可能だが、このような新たな資料における関係詞の分布が、Brooks (2006) による上部ドイツ語の出版物に関する調査結果と同じ傾向を示すのか、⁶² もしくは、聖書等の宗教的テキストに比すればその需要を開拓する余地が大きかったことから、パンフレットやビラという形態で世に送り出された時事報告と同等の傾向を示すのかという点も、16世紀後半におけるニュルンベルクの都市言語の不均質性を探る上で重要な課題となるように思われる。

⁶⁰ 例えば Brooks (2006) は、先行詞が事物の場合、16世紀においては「da[r]+前置詞(代名詞的副詞、現代語の「wo[r]+前置詞」に相当)」の使用が優勢だったのに対し、世紀の変わり目には「前置詞+welcher」の出現率が激増する点を指摘している (Vgl. S. 143; auch S. 156, Tabelle 5k).

⁶¹ 例えば次のものが16世紀後半のニュルンベルクで出版されている: Franz Joachim Brechtel: Büchsenmeisterey. Das ist: Kurtze / doch eigentliche erklerung deren ding / so einem Büchsenmeister fürnemlich zu wissen von nöten. Nürnberg 1599.

⁶² Brooks (2006) が資料とした上部ドイツ語のテキストは、ウィーンを始めとするオーストリアの主要都市及びミュンヘンやパッサウで印刷されたものである。ニュルンベルクはミュンヘンやパッサウと同じくバイエルン州に属するが、地理上は東フランケン方言地域と北バイエルン方言地域の境界に位置している。それゆえに16世紀におけるニュルンベルクの言語は東上部ドイツ語圏と東中部ドイツ語圏にとって蝶番の役割を果たしたと考えられており、この点からも詳細な調査を行なう必要性のあることが指摘されている (Vgl. Mechthild Habermann: Möglichkeiten und Grenzen soziolinguistisch orientierter Textkorpusbildung am Beispiel Nürnbergs um 1500. In: Historische Soziolinguistik des Deutschen. Forschungsansätze - Korpusbildung - Fallstudien. Internationale Fachtagung. Rostock 1.-3.9.1992. Hrsg. von Gisela Brandt. Stuttgart (Heinz) 1994, S. 51-61, hier S. 51).

調査資料

パンフレット（全てレーオンハルト・ホイスラーによりニュルンベルクで印刷）

1. Klegliche erbermliche Zeytung / vnd eygentlicher Bericht / ansehenlicher / fürnemer vnd warhaffter Personen / auß Wenden / Riga / vnd andern Lifflendischen orten geschrieben. 1578. [6] Bl. — Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel (=HAB), Gu 161 (2), Aij^v-Bij^v.
2. Moscouittische Tyranny. 1578. [10] Bl. — HAB, Gu 161 (1), Aij^v-[Cij]^r.
3. Deß Türckischen Keysers ernstliche Straff. 1579. [3] Bl. — HAB, Gv Kapsel 7 (24).
4. Türckische grosse Niederlag. 1579. [8] Bl. In: Flugschriften des späteren 16. Jahrhunderts. Serie XIV. Hrsg. von Hans-Joachim Köhler. Leiden (IDC) 2003, Fiche 2623 / Nr. 3998 (Exemplar: München, Bayerische Staatsbibliothek (=BSB), Res / 4, Turc. 84, 38).
5. VICTORIA Frewdenreiche Türckische Niederlag / vnd sieghaffte Schlacht [...] 1579. [4] Bl. In: Köhler (2003), Fiche 2535 / Nr. 3916 (Exemplar: BSB, Res / 4, Turc. 97, 22).
6. Polnische vnd Reussische Zeittungen. 1582. [8] Bl. — HAB, Gu Kapsel 2 (16).
7. Türckische Beschneidung. 1582. [8] Bl. — HAB, 95.1 Hist. (4).
8. Persische Victoria, vnd Türckische Niederlag. 1583. [4] Bl. — BSB, Res / 4, Turc. 85, 2.
9. Dritte Zeyttung / vnd warhaffte Victoria in Vngern. 1593. [4] Bl. — HAB, 218.11 Quod. (26) (<http://diglib.hab.de/drucke/218-11-quod-26/start.htm>).
10. Noch weytere / mit Gottes hülff Zeyttung auß Vngern. [1594]. [4] Bl. — HAB, 218.11 Quod. (27) (<http://diglib.hab.de/drucke/218-11-quod-27/>)

start.htm).

11. Novigradt die groß Vestung eingenommen. 1594. [4] Bl. — HAB, 198.14 Hist. (96).

ピラ (印刷地は全てニュルンベルク)

1. Ein new streydtbars / [...] glaubhaftige wunderzeychen / [...] [1550]. Gedruckt von Stefan Hammer. In: Zeichen am Himmel. Flugblätter des 16. Jahrhunderts. 25. Wechselausstellung der Graphischen Sammlung des Germanischen Nationalmuseums Nürnberg. 12. März bis 29. August 1982. Hrsg. von Gerhard Bott. Nürnberg (Germanisches Nationalmuseum Nürnberg) 1982, S. 15.
2. Anzeygung vnd Contrafactur / wie den xxj. Martij zum Genantstein / gesehen ist worden. [1551]. Gedruckt von Stefan Hammer. In: Bott (1982), S. 17.
3. Ein Erschrecklich vnd Wunderbarlich zeychen / [...] [1554]. Gedruckt von Joachim Heller. In: Bott (1982), S. 23.
4. Ein erschröckliches vnd warhafftiges Wunderzeichen / [...] [1554]. Gedruckt von Hans Glaser. In: Bott (1982), S. 27.
5. Jm M. D. Liiij. Jar den xj. Junij / ist dis gesicht / oder zeychen [...] gesehen worden [...] [1554]. Gedruckt von Georg Merckel. In: Bott (1982), S. 25.
6. Ein grausames Erschröcklichs war vnd Glaubhaftigs wunderzeychen / [...] [1555]. Gedruckt von Wolfgang Strauch. In: Bott (1982), S. 29.
7. Ein erschrocklich wunderzeichen / von zweyen Erdbidemen / [...] [1556]. Gedruckt von Hermann Gall. In: Bott (1982), S. 33.
8. Ware Conterfectung / etlicher ers[c]hrockenlicher vnd züuor

- vnerhörter gesicht / [...] [1558]. [anonym] In: Bott (1982), S. 37.
9. Ein sehr erschröcklich Gesicht vnd Wunderzaichen / [...] [1560].
Gedruckt von Georg Kreydlein. In: Bott (1982), S. 39.
 10. Ein grausamb / vnd erschröcklich wunderzeychen / [...] 1561. Gedruckt
von Georg Merckel. In: Bott (1982), S. 41.
 11. Was zu Nûrnberg am Himel dises Tausendt fünffhundert zwey vnd
sibenzigsten jars / im Januario den 17. in der nacht gesehen worden
ist. [1572]. Gedruckt von Hermann Gall. In: The German single-leaf
woodcut, 1550-1600: a pictorial catalogue, by Walter L. Strauss. Vol. 1.
New York (Abaris) 1975, p. 233.
 12. Warhaftige vnd erschreckliche Neue Zeitung auß Vngern von der
Stadt Temesuar / zu jetziger zeit T[ü]rckisch / durch verhengknuß
Gottes / gantz in grundt verderbt vnd versencket ist. [1576]. Gedruckt
von Leonhard Blümel. In: Strauss (1975), Vol. 1, p. 122.
 13. Verzeichnuß des Cometen / so in den Nouemb: im disem 77. jar zum
ersten mal gesehen worden. [1577]. Gedruckt von Georg Mack d. Ä. In:
Bott (1982), S. 59.
 14. Warhaftige Contrafactur / eines sehr grossen Walfischs / [...] [1577].
Gedruckt von Hans Weigel d. J. In: Strauss (1975), Vol. 3, p. 1140.
 15. Kurtze vnd warhaftige Historia / desz / was sich am verschinen
Pfungstmontag / den 19. des Monats May / [...] zugetragen [...] [1578].
Gedruckt von Leonhard Heußler. In: Strauss (1975), Vol. 1, p. 422.
 16. Warhaffte vnd gewisse Abcontrafeytung einer Miszgeburt / [...] [1578].
Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 695.
 17. IN disem 1579. Jar / ist disz Krawt / [...] gewachsen [...] [1579].
Gedruckt von Leonhard Heußler. In: Strauss (1975), Vol. 1, p. 424.

18. Erinnerung vnd Warnung / von dem jetzt scheinenden Cometen / [...] [1580]. Gedruckt von Hans Mack. In: Bott (1982), S. 63.
19. Warhafftige vnd erschröckliche geschicht / dreyer Maineidiger Personen/ [...] 1580. Gedruckt von Leonhard Heußler. In: Strauss (1975), Vol. 1, p. 425.
20. Ware Contrafactur / des jüngsten Zorn vnd Wunderzeichens / [...] [1581]. Gedruckt von Leonhard Blümel. In: Strauss (1975), Vol. 1, p. 124.
21. Contrafactur Des jüngst erschinen wunderzeichens / dreier Sonnen / vnd dreier Regenbogen / [...] [1583]. Gedruckt von Matthäus Rauch. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 851.
22. Ein Warhafftige beschreibung vnd urtheil von etlichen Frembden vögeln/ [...] [1586]. Gedruckt von Georg Lang. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 577.
23. Ein warhafttes Seewunder / von dreyen Heringen / [...] [1587]. Gedruckt von Leonhard Heußler. In: Strauss (1975), Vol. 1, p. 426.
24. ZEittung / oder Bericht / Wie es sich auff der gehaltenen Schlacht / [...] begeben vnd zugetragen hat [...] [1588]. Gedruckt von Georg Lang. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 578.
25. Jemmerliche Zeitung / vnd Schröckliche Mordthatten Frantzen Seüboldts / [...] [1589]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 700.
26. Warhafftige Newe Zeitung / so sich zu Constantinopel zugetragen / [...] [1589]. Gedruckt von Leonhard Blümel. In: Strauss (1975), Vol. 1, p. 125.
27. Warhafftige Newe Zeitung / Welcher massen Henricus der 3. [...] erstochen ist. [1589]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975),

Vol. 2, p. 699.

28. Warhafftige vnd Erschr[ö]ckliche neue Zeitung auß Wien / [...] 1590. Gedruckt von Georg Lang. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 580.
29. Ein erschröckliche Neue Zeitung / so sich im 1591. Jar zu Preßburgk in Vngern zu getragen / [...] [1591]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 703.
30. Ein Wunderbarlich gesicht / So den 29. Augustj / [...] ist gesehen worden. [1591]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 702.
31. Erschreckliche Wunderwerck / [...] [1591]. Gedruckt von Wolf Drechsel. In: Bott (1982), S. 75.
32. Erschröckliche Ze[ü]tung [...] [1592]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 704.
33. warhafftige vnd Glaubwirdige Conterfactur eines schr[ö]cklichē Wunderzeichens / [...] [1593]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Bott (1982), S. 77.
34. Zeittung aus Wittenberg Dieses 1593. Jars den 25. Januar[i] / seindt diese Drey Regenbogen [...] gesehen worden. 1593. Gedruckt von Georg Lang. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 581.
35. Zeytung auß Straßburg den 28. February / von vertrags Punkten beyder Bischoffen betreffent. jm 1593. Jar. [1593]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 713.
36. Neue Zeytung auß Win den 2. May des Newen Kalenders / wie der Herr von Dieffenbach die T[ü]rcken bey Haduan geschlagen / vnd biß auff das Haupt erlegt. jm 1594. Jar. [1594]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 714.

37. Ein wunderbarliche Neue Zeytung / WJe [...] ein Comet etlich stund lang erschienen [...] [1595]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 718.
38. Neue Zeyttung / Auß Weissenburg in Sibenbürgen / [...] [1595]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 717.
39. Neue Zeytung auß der Reuschischen Lemberg [...] [1595]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 715.
40. Warhafftige neue Zeytung auß Gratz [...] [1595]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 719.
41. Neue zeittungen. Welcher massen [...] der Herr Nicolaus Balfy [...] die Christen zu Alt Ofen / von der Türckischen dienstbarkeyt erlediget [...] [1596]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 720.
42. Ware Conterfeyhung eines abscheulichen Aland Fisches / [...] [1599]. Gedruckt von Matthäus Rauch. In: Strauss (1975), Vol. 2, p. 852.
43. Neue Zeitung / Von einem erschröcklichen Wunderzeichen / [...] [1605]. Gedruckt von Lucas Mayer. In: Bott (1982), S. 79.